



[講演]

ヨーロッパ地域の日本語教育の動向と日本語教育専門家の取り組み

パリ・ディドロ（パリ第七）大学准教授
大島 弘子

○大島 フランスから来ましたパリ・ディドロ大学の大島です。「移動する学習者の日本研究という核を充実させるための取り組み」についてお話しさせていただきます。

私の勤務するパリ・ディドロ大学は、立教大学との間に、交流協定を数年前に結びました。初めての派遣は2012年の9月ですが、実際に学生を送り出す前に、うちの大学からは、同僚の堀内と中島の2人が、『フランスの学習者が日本留学に望むもの』というタイトルで、立教大学日本語教育センターの『日本語・日本語教育』創刊号に寄稿論文を書いています。パリ・ディドロでは、日本に送られたフランス人学生は、必ず自分の留学校についての報告レポートを提出するのですが、その寄稿論文では、既にそれらの学生のコメントを分析した結果がかなり詳細に報告されています。

既にそのようなものが出ているので、今回の発表では、内容がもう少し具体的になるように、実際にパリ・ディドロ大学から立教大学に派遣した3人の学生、O君、M君、B君と呼びますが、その3人の学生を取り上げ、彼らが、日本語の授業やそれ以外の授業、または自分の研究についてどんなことを言っているかご報告したいと思います。そして、そのようなコメントが出る土壌や背景がもう少し明らかになるように、実際に彼らが受けたパリ・ディドロ大学の日本語の授業がどのようなものであって、またその授業に対する仏人学生の授業評価の一般的傾向がどのようなものであるかを述べたいと思います。

そして最後に、3人ともパリに残っていたら、修士の1年生として受けるはずの論文指導のための授業がどのようなものであるかについてお話ししたいと思います。

います。【スライド③-2】

これは、3人の学生の日本語レベル判定結果なのですが、3人の学生の中で、O君は、2012年の9月から1年間の滞在を終えて、既にパリに戻っています。B君とM君は、現在留学中です。O君はもう帰ってきていますから、インタビューで話したのですが、立教大学への留学は有意義だったと、楽しかったと総括しています。特に国際センターの方々の仕事を称賛していました。B君とM君の場合はメールで話し合いました。二人とも留学生生活はうまくいっていると述べています。ですから、全体的には何の問題もないのですが、今からお話するのは小さなコメントです。

ここでは、日本語の授業と論文執筆に関する彼らのコメントを取り上げながら、フランスからの留学生の要望をお伝えしたいと思います。

O君、B君、M君、3人とも男の子で、学年はマスターの1年生です。フランスは学部にあたるリソンスが3年なので、彼らは4年目の学生です。フランスでは修士の1年生にあたります。日本では学部が4年なので、ここにちょっとずれがあって、彼らのような4年目の学生を学部生とするか、院生と扱うか、問題のあるところだと思います。この点については後ほど述べます。

この表があらわしているのは、プレースメントテストの結果、3人はそれぞれ、このようなレベル判定をされたということです。みんな同じようにパリ・ディドロ大学の3年目の日本語教育を終えた学生なんですけど、最初のプレースメントテストの結果が違ったものになっています。フランスでの去年の成績を思うと、M君のほうが、B君より成績はかなりいいはずなのですが、これを見ていただくと分かるように、B君のレベルのほうが高くなっていて、ちょっと私もびっくりしたのです。でも、M君もB君も、このクラス結果については何も言いません。ただ、O君は前期にJ4のレベルだと判断されて、それでちょっとがっかりしたようです。特に、読み書きに比べて、彼は会話能力や聞き取り能力にちょっと自信があったので、口頭表現能力のチェックが、あまりに短い時間の質疑応答で行われたことに、ちょっと不満があるというふうに言っていました。【スライド③-3】

これは3人の学生たちに、自分たちの受けている日本語の授業についてコメントしてもらったものです。ここで○で示したのはオーケー、何も言うことがないということです。パリ・ディドロ大学の日本語科では、毎学期ごとに、学生に

各授業の評価をやってもらう習慣があります。ですから、学生には教師の個人攻撃をするのではなくて、建設的な意見を述べるようにというふうに、1年生のときから言っていますし、パリ・ディドロ大学では、学生の評価の後、教師側は会議を開いて、学生の評価の結果報告を分析し、みんなで意見を出し合い、解決策などを考えることを習慣にして、結構まじめにやっています。ですから、日本語科の学生は授業についてコメントすることに慣れていて、自分なりに考えたまじめな意見を穏やかに表現しており、単なる文句や感情の吐露ではないので、ちょっと何か不服を示したとしても、それは色々真面目に考えた結果であるというふうにおとりください。

ここでO君は、文法の授業と作文の授業の間に、内容面、レベル面での連携があって、文法の時間で習った項目が作文の時間に生かされているということを高評価しています。それに比べて、読解と会話の時間は、同じレベルの授業のはずなのに、レベル統一されていないバラバラな感じがすると言っています。読解はちょっと難し過ぎる感じで、会話は易し過ぎると言っています。フランス人の学生が、難し過ぎ、易し過ぎというようなことを言う場合に、どちらのほうの問題かという、難し過ぎというのは、あまり問題がないというか、難し過ぎるから一生懸命勉強して、結局上達しました、というような結果も出てくるので、難し過ぎというほうがあまり問題はなくて、易し過ぎというときに、彼らは何か問題があると考えていることが多いのです。

M君も文法の時間と作文の時間を、O君とは同じレベルのクラスではないですけど、やっぱり非常に連携していると感じています。作文の時間について、彼は、現代日本社会のいろいろな問題、例えば、メディアの役割、教育問題、現代社会事情など、教師と生徒の意見交換の場としても機能していると言っています。今述べたことが、彼が求めていることで、それが作文の時間に与えられているということだと思います。

会話の時間に関しては、O君もM君も、易し過ぎてあまり興味がわかないということを行っています。それでも、どんな活動が楽しかったかという問いに、O君が1つだけ面白かったと答えた活動があります。それは、自分の国の社会問題について発表して、それは失業問題だったらいいのですが、他の学生からの質問に答えたり、他の学生からコメントしてもらって、その発言内容が間違っていれば訂正をしたりという、ディスカッション形式で自分の国について語るとい

う活動でした。フランス人は、すごくささいなことにでも自分の意見がしっかりあるので、ディスカッションとかディベートを好み、そういう活動を高く評価するということが分かっていただけだと思います。

それからO君は、読解の授業については、語彙も漢字も文法も、他の授業とレベルが違って、ちょっと難しいと言っていました。それでも留学生向けのゼミで読んだ三浦しよんの『舟を編む』とか、吉本ばななの『キッチン』とかはとても面白かったと言っていたので、難易度の問題だけでなく、時事性や自分との関係性等で、このテキストは面白いとか、難しいとか、そういうふうに判断するんだと思います。

M君の場合は、会話の授業について、パリ・ディドロ大学の2年のときにやった授業と同じでやさし過ぎると言っています。2年の時の会話がどのようなものであるか、後でお話しますが、現在彼が受けている会話の授業にそのような感じを抱いているということです。読解の授業も易し過ぎると言っているのですが、これはどういうタイプの授業かということ、速読タイプの授業ということなんですね。つまり精読しない、深く入らないという意味なんです。これは、フランス人学生は、フランス人教師のやる精訳の読解、つまり時間をかけて細かく読む読解の授業に慣れているので、日本人教師がやる読解の授業は速くて表面だけを読んでいる感じがし、何かつまらないというふうに感じてしまう、そのような習性があるのだと思われます。

あと文法の時間に三角がついているのはどういうことかということ、レベルも自分に合っているし、作文の時間との連携も高評価しているが、一つ言いたいことがあるということなのです。それは、文法の時間にいつもプリントが配られるそうなのですが、それがいつも、文法用語が英語だそうで、日本語を勉強しているのだから、「Noun」などと書かずに、ちゃんと最初から「名詞」と書いてくださいということで、これはフランス人らしいコメントなのですが、日本に来るのは日本語を勉強しにくるからであって、英語で書いたものを渡してくれるなどというような要望です。

次は語学の授業以外で彼らが受講している授業についてです。これらは、それぞれ非常に面白いということです。日本人の学生向けなので難しいというふうに私たちには思えるのですが、自分の研究に関係があるものを選んでるので、どれも非常に面白くて満足しているということです。【スライド③-4】

次に、三人の学生と論文についてですが、この3人の学生が、自分の論文についてどんなことを言っているかを見ます。フランスは学部にあたるリソンスが3年で終了ですので、彼らは4年生ですが、フランスでは修士の1年生にあたることは既に申しました。リソンスには卒業論文がなく、試験に合格し、単位を取得さえすればいいわけですが、修士の1年目を終えるには論文を書かなければなりません。この表を見るとそれぞれの研究テーマが分かります。日本研究ですので、いろいろな、ばらばらのテーマが出てきます。

○君はあまり研究者向きのタイプではなく、論文テーマもなかなか決まらなかったもので、留学前は日本人話者の話すフランス語を研究すると言っていたのですが、途中で方向転換し、結局、「総合商社」を最終テーマに選びました。誰の指導も援助もなく自分一人で参考文献を探し、論文を書いたと言っていますが、図書館の使い方や論文資料の探し方については国際センターのオリエンテーションがとてもよかったので、何も問題なかったというふうに述べています。ただ、学部生というステータスが与えられたのですが、そのステータスには疑問を持っていて、特に、同じフランスから修士1年の留学生が数人来ていたそうですが、それぞれの扱いが違ったということで、同じ学年の留学生なのに、立場が違ったのはどうも納得できないと言っていました。

B君とM君はもう少ししじめで、留学前から研究テーマをきちんと決めており、指導教官との話し合いも数回行った上で留学しているのですが、B君は全然論文が進まないと言っており、論文執筆のための時間が全然持てないと言っています。先ほどの日本語の授業についてはB君は何も否定的なことを言っていないということからお分かりのように、B君はあまりいろいろ言わない子なのですが、自分の論文については、急にそこだけトーンが上がって、何をやる時間もないというふうに言っています。

そして、授業に出て勉強していれば学部生としてではなく、研究論文を進めなければならない院生として扱ってほしいと言っています。資料探しなどを手伝ってくれるはずのチューターが与えられていますが、B君のチューターの場合は学部生で、研究分野も少し違い、あまり頼りにならないということも言っています。○君の場合のチューターも自分より学年が下の学部生だったので、携帯電話の契約など、日常生活の細々したことの手伝いや日本語のクラスの宿題の手伝いなどいろいろ助けてもらって感謝しているが、論文のことを相談できる院生

のチューターがいればよかったのと言っていました。

M君の場合ですが、M君だけが今のステータスで問題ない、学部生でもかまわないと答えています。彼には、院生の研究分野に近いチューターがついているようで、参考文献探しの手伝いだけではなく、彼は古文書を読んだりしているのですが、その古文書の読み方も指導してもらっているようで、非常に満足していると答えています。

前述しましたように、M君の日本語能力は、本来ならB君より高いはずなのですが、M君の場合は、自分のレベルより下のクラスに入れられたため、語学のクラスの勉強には余裕があるのではないかと考えられます。ですから、その部分を院生と一緒に古文書を読んだりして、自分の研究分野の勉強をすることができ、そのため満足度が非常に高いのであろうと考えられます。反対に、B君は、多分自分の日本語能力を目いっぱい使わなければならないレベルの日本語クラスに入ったために、その部分で余裕がなく、論文のところまで手が回らないように感じられます。O君は、かなり低いレベルの日本語クラスに入れられがっかりしたと言っていますが、ひょっとしたらそのため余力が生まれ、テーマを変更して、全然違うものにしたにもかかわらず、一人で論文を書き上げられたのかもしれないというふうにも考えられます。**【スライド③-5】**

次に、この3人の学生が、今までどのような日本語の授業を受けてきたかをしめすために、パリ・ディドロ大学の1年から3年までの、日本語の授業の概要をお話したいと思います。そして前述しましたように、パリ・ディドロの日本語科では、各学期の最後に、必ず学生による授業評価が行われていますので、
 どういうタイプの日本語の授業に、どのような評価をする傾向があるかということをお話しておきます。



1年生は、『みんなの日本語Ⅰ』をベースに、週一課のペースで進みます。まず、週の初めに「文法」の授業がフランス語で行われ、その課の大事な文法が全部説明されます。アメリカ人なら、多分練習からスタートするとか、会話からスタートするとか、できるのではないと思うのですが、フランスでは文法中心、つまり文法説明が先で、

その後の授業は全部その応用をするという考え方が根強く残っており、これを守らないと、学生からは、「文法説明が足りないのでよくわからない」という反応がすぐ来ます。O君やM君が、文法の時間と作文の時間が連携しているなどと言っているのは、このためです。文法中心で、ほかの授業がそれに合っているかどうかをいつも考えているのです。

私は個人的には、それほど文法を説明しなくても、日本語の授業は十分やれると思っていますが、フランス人学習者のニーズを語るとき、文法説明は不可欠と言えます。それから、文法の時間に説明されたことの応用の授業として、練習、読解、会話が考えられており、大体この順番で、会話の授業は週の終わりに来ます。漢字の授業は、日本語科でつくった漢字練習帳を用いています。漢字は『みんなの日本語』の各課から抜き出したものを用い、読み書きの練習問題も語彙や文法はその課のレベルで統一してあります。フランス人の教師は、文法か読解の時間を担当することが多く、その場合、読解は、和文仏訳の授業になります。その他の授業は大体日本人教師がやりますが、会話はネイティブの語学担当、若い先生です。つまり2年契約の常勤講師です。基礎会話、応用会話となっているのは、基礎会話は主教材に即して行う。応用会話は主教材を離れて、もう少し自由に行うという、2つのタイプの会話の授業が1年生のときから考えられているからです。【スライド③-6】

次が2年生。2年生もほとんど同じですが、教科書だけが『みんなの日本語II』に行きます。つまりフランスでは、「みんなの日本語I」を終えるのに1年もかかるというふうに理解していただきたいと思います。これ以上速くいくと、文法が消化し切れなくて大混乱を起こしてしまう。既に確かめたのですが、このぐらいの速度じゃないと駄目ということで、この速度で何年前から安定しています。ここでは、独立した漢字の授業がなくなって、漢字は漢字練習帳を見て家で勉強してくる。学校では漢字テストをしてチェックしているだけです。つまり漢字はもう自分で勉強してこいというふうなことになっています。その分、何にあてているかというと、仏文和訳にかける時間が長くなっています。フランスの語学教育の中では、Version, thèmeと言っているのですが、外国語テキストの仏語翻訳、仏語テキストの外国語翻訳の練習が、今でも重要な位置を占めていて、資格試験とか採用試験とかに、このタイプの問題が必ずと言っていいほど出題されます。これはもう欠かせないもので、しょうがないんです。【スライ

ド③-7】

次に、学生の授業評価のおおむねの傾向ですが、小さい批判はあります。1クラスの学生数が多過ぎるとか、夜遅い授業など、時間割の偏りなどがあるというようなこと、そういうような批判はあるのですが、大体、日本語の授業の内容にはあまり批判がなく、むしろ満足だという回答が多いのですが、その中でも、高評価の理由として挙げられるのが、月曜日の文法から金曜日の会話に向けてのこの流れと、1週間に一課の進度の一定性、あとは授業間の整合性、補完性です。つまり文法の授業で習ったことを、ほかの授業でちゃんと再度取り上げ復習する形になっているという、整合性、補完性が、学生からいつも高評価を受けるので、そのようにし続けているということです。立教に送った学生が、日本語の授業間のレベル差、整合性についてあれこれ言ったり、評価したりするのは、この傾向なんです。

1～2年生でもう一つ評価が高いのは、会話の授業で、1年生の初めには何もしゃべれなかった学生が、だんだんしゃべれるようになってきて、いろいろなことが言えるようになって、自分の進歩が自分ではっきりとらえられる。このようなことが、非常に会話の授業を高評価する原因になっています。

ところが、同じような会話の授業を続けると、学生達は2年生後半から3年目にかけて、会話の授業がつまらないと言い出します。子供っぽい、取り上げられるテーマがいつも身の回りのこと、学生生活とか、そういうことに限られている。そういう批判が出てくるんです。これはどういうことかということ、つまり1～2年から3年生にかけて、学生がだんだん年齢的に大人になって、知的にどんどん成長してくるということ。それから語学以外の授業では、フランス人の教師が自分の専門について語る授業がたくさんあって、日本に関する知識がどんどんふえてきます。語学力と知識・関心の差が非常に広がってくるんですね。ですから日本語では大したことが言えなくても、頭の中の知識量がすごく増えてきます。

ちなみに、先ほど、立教に留学しているM君が、会話の授業を評して、2年生で受けた授業みたいで易し過ぎると言ったのは、日本語の教科書に出てくるような、身近な話題の会話例をベースに授業を進めると、フランス人の学生はすぐに、子どものように扱われているとか、つまらないと感じてしまう傾向があるということです。【スライド③-8】

では、1年生、2年生で彼らが受けている語学以外の授業がどのようなものかという、かなりいろいろなものがあることがお分かりになると思います。これを彼らは各学期に1つ、または2つを選択して受講しています。これらの授業はいろいろな分野に分かれていますが、教師の専門に対応しているからです。つまり、日本語科と言っても、属する教師のほとんどが言葉を専門にしている人ではありません。准教授、教授、合わせて13人の専任教官がいるのですが、その中で、言語学等、言葉の研究をしてきた人は、私と、もう一人同僚がいるだけで、あとはみんな、全然違う分野の専門家です。これらの授業は、当然みんなフランス語で行われ、内容は結構深く、面白く、おおむね学生に高評価を得ています。【スライド③-9】

次に、3年生になると、かなりばらばらになってきて、1年生、2年生みたいには組織化されていないんですが、それでも「テーマ別中級から学ぶ日本語」を使ってやっている授業があります。この授業は仏人教師と日本人教師が組んで行って、1週間に1課のペースで進みます。仏人教師がまず文法説明をしながら本文を訳し、日本人教師が、語彙、文法練習、漢字、仏文和訳等、応用をやります。この2つのクラスの連携がうまくいっていると、学生はこの授業を高評価します。

作文の授業は、自分の意見をいろいろ書けるので彼らは嫌いではないのですが、試験のやり方に文句がつくことがあります。それは日本人教師が、試験のときにその場で急にテーマを与えて作文を書かせると学生の負担が大きくて大変だろうと考え、先にテーマを与えて家で書いて、それを覚えて来て、それと同じものを試験場で書かせた場合などです。日本人教師の思惑とは違い、フランス人学生からは反発を買います。これはなぜだかお分かりですか。つまりフランス人は、暗記してこいなどということをして小学生の宿題のように感じるんですね。非常に幼稚な作業だと感じ、ばかにされていると感じてしまうのです。

どういうふうにしたらいいかというと、むしろ、その場で苦しませる。仏文和訳や和文仏訳もみんな同じなんですけど、そこで辞書を見ることもできず、自分の実力を精いっぱい用いて、ああでもない、こうでもない長時間悩んで書いたものが採点される。そういうのをよしとするんですね。ですから家で書いて暗記してこいとかは試験としてはだめなんです。

次に会話の授業に関してもう一度言いますと、1年、2年と同じようなタイプ

でやっている、面白くないと評価されます。では、どういうふうに行っているかというと、一人一人が十分に話せる時間を与えないとすぐに文句が出るので、いろいろプロジェクト・ワークをやったり、ビジュアセッションをやったり、時事性のあるテーマで発表させたり、ディスカッションやディベートをやったりと、結構教師の努力が求められる授業になります。

試験もやり方によっては文句が出ます。今学期は4人1組のグループにしてのディベートで、テーマはその場でくじ引きで決められ、1つのグループに10分が与えられました。そしたら、4人もいると、1人2分ほどしかしゃべれないので何も言えないというふうに、文句が出ました。もっと長い時間しゃべらせてほしいというんです。フランス人の学生は、皆、自分の意見がきちんとしてあるので、ディベートにしてもディスカッションにしても、自分の意見を十分言える時間を与えてほしいというわけです。

次に3年生の読解の授業ですが、読解の授業は3つあります。学生は其中で2つを選択して受講します。速読というのは、日本語能力試験タイプのテキストを速くざっと読んで、質問に答えたりする授業です。新聞・雑誌記事講読は、政治経済や社会学を専門にする私人教師がやるため、精読して翻訳するだけではなく、内容の社会背景にも踏み込むとても難しい授業で、授業前の準備が大変だということですが、学生は、難しく、準備も大変だけれど、とても勉強になるというふうに、最終的には好意的な評価を与えます。

あとは文語（古文）が3年生から登場します。文語を選択するのは大体優秀で、特に言葉に興味をもっている学生です。これも担当するのは、古典文学の専門家で、授業では文法を習うだけでなく、いろいろなテキストも読めて面白いということです。

あとはキャリア科目として、日本語能力試験準備講座もあります。これは、フランス人はもともと、ああいう四択のような問題をやる伝統を持っていないので、能力試験に受かってもらうために、特別に、技術的に特訓をしている、そういう授業です。これ以外に、学部の最終学年なので、修士課程に向けて、専門分野に誘うような専門科目もあります。1つを選択して、自分の専門を決めて行くという形になります。

以上、パリ・ディドロ大学の授業を説明しましたが、これで3人の私人学生の、立教で受けている授業に対するコメントが、どんな背景から生まれるのか分かつ

ていただけたのではないかと思います。【スライド③-10】

次に、修士の1年生に当たる4年生は、初めて論文を書かなければならないので、それに関する科目が幾つかあります。自分の専門分野のゼミは2つ取らなければいけないのですが、ここで取り上げるのはそれではなくて、前期のみに開講される、論文を書く方法を学ぶ、メソドロジーと呼ばれる授業です。これは4年生の学生が必ず受けなければいけない、かなり重要な授業と考えられています。

その授業は2つの部分に分かれています。1つは自分の専門分野により受ける、専門分野のメソドロジー。つまり文芸、言語学、歴史学・社会学という3つのグループに分かれて受講する方法論。自分が例えば言語学についてやりたければ、中国語科、韓国語科、ベトナム語科の言語学をやりたい学生と一緒に受けます。言い忘れましたけれども、私の属する東アジア言語文化学部では、中国語、韓国語、日本語、ベトナム語の4カ国語の学科があります。ですから4つの学科が合同でやっているメソドロジーです。これを24時間受けて、その後で、日本語学科の学生は、今度は日本学、日本についての研究の方法論を学びます。これは、日本語科の中だけでやるメソドロジーの授業、これが12時間あります。ここで学生は、論文の書き方、資料収集の方法、分析の仕方など、論文執筆に必要なことを勉強します。【スライド③-11】

また、メソドロジーの担当教官は、何日までに論文のタイトルを出せとか、何日までに参考文献リストと論文の構想を示すことのような締切日を設定して、どんどん学生のお尻をたたいて、学生の執筆がきちんと進むように指導します。また、授業の中ではパワーポイントを用いて、学生に順番に発表をさせて、注意したりコメントを与えたりします。つまり、これがパリにいる学生が受ける授業なんです。ですから立教大学に送られてくる学生は、この部分が完全に欠けてしまうということになります。

学生は、この締め切りを守って論文を進めていくのですが、それをしなければ、論文が書けないだけではなくて、メソドロジーの単位も取れないんです。これは立教に留学している学生も同じで、この単位は取らなければいけない。つまりフランス側で取らなければいけないんですね。日本に送られてくる学生は、もともとはすごく優秀な学生で、最初はちゃんと、日本に留学しても論文を書くつもりでいるのですが、それでも日本留学中に論文が書けなくなる学生が少なくないの

です。論文が書けないと、立教で一生懸命授業を受けて単位を取ってきても、結局修士の1年が終わりません。ですから修士2年に行けないで、論文だけを残す、すぐ中途半端なことになって、そのためにモチベーションをなくしてしまう人がいます。

もともと優秀だった学生がそのような悲惨な状態になるのにはいろいろな理由が考えられます。まず、授業の単位をとるのに精いっぱい、論文を書く余裕がない、そういう学生がいる。または、論文執筆のために必要な指導や援助を十分に受けられないことが主な理由になるということもあります。

日本への留学希望者は、3年目の学生が最も多いので、パリ・ディドロ大学からの留学生は、ここで挙げた3人の学生のように、日本で4年目を過ごす、つまり修士1年の学生が多いです。今まで立教に送った学生はそうですし、これからもそのケースが多いと思います。その場合、学生には、日本語の上達と論文執筆という2つの目標があり、どちらも達成しなければなりません。そのためには、一方だけに偏らず、両方のバランスを取ることが必要になります。日本語の授業の準備・復習、宿題、小テスト、試験などでいっぱいになってしまい、資料収集、資料を読む、論文執筆を進めるための余力がなくなってしまっては困るので、2つの目標間のバランスがうまく取れるような配慮が必要になります。そのためには、授業だけ受けて単位を取れば良いという学部生とは違い、フランスの4年生は、研究をして論文を書かなければならない院生として扱ってもらえることが望ましいと思います。

また、日本語のレベルが2つのクラスの間ぐらいに位置し、上のクラスでも、下のクラスでも、どちらのクラスに入ってもいいような場合、学生と話し合いの上で、学生の余力に合わせて選ばせるというような対応があれば素晴らしいと思います。

また、日本語の上達が論文執筆を助長し、論文執筆が日本語の上達を助長する、相互作用の機会や場を与えられることが望ましいと思います。例えば、研究分野の近い院生のチューターをつけてもらえれば、研究テーマや参考資料について、日本語で説明したり、話し合ったりする機会も得られるわけで、それは自分の研究分野に関連した日本語上達のためのいい機会になると考えられます。また、語学の授業の中でも、授業外でもいいのですが、パワーポイントなどを用いて、自分の研究について発表したりする機会、あるいは分野に近い他の院生の発表を聞

いたりする機会がもし与えられれば、日本語の勉強と、自分の研究との両方に役に立つ、いい機会になるだろうと思います。

日本語の授業の内容も、できれば、留学して今現在東京にいたことが、十分生かされるようなものであってほしいと願います。そのためには、時事性が高いテーマ、現代社会に密着した問題、地域性のある話題らが扱われることが望ましいと思います。また、クラスで同じ教師、クラスメートと話すだけでなく、ほかの日本人学生や地域の日本人等、できるだけ多くの日本人との意見交換、情報交換ができ、その上で、何か協働の作業をするなどの機会を授業の一環として持つようなことができれば素晴らしいと考えます。こういう一般人との接触の中で、教室の中では学べない社会文化的なスキルなども学べるようになるのではないかと考えられるからです。

すみません、長くなりました。ご清聴ありがとうございます。(拍手)【スライド③-12】

○平山 大島先生、ありがとうございました。

それでは第1部最後のご発題を徐先生をお願いいたします。徐先生、よろしくをお願いいたします。



【スライド③-1】

ヨーロッパ地域の日本語教育の動向と日本語教育専門
家の取り組み

移動する学習者の日本研究という核を充実
させるための取組み

PARIS
DIDEROT

パリ・デイドロ(パリ第七)大学
東アジア言語・文化学部日本語科
大島弘子

【スライド③-2】

発表内容

- I. 立教大学に送った三人の学生のプロフィールとコメント
 - ❖ 授業について
 - ❖ 自分の研究について
- II. パリ・デイドロ大学の日本語授業と学生の授業評価
- III. パリ・デイドロ大学修士一年生の論文指導
- IV. 結論
 - ❖ 日本の日本語教育機関に期待すること

【スライド③-3】

三人の学生と日本語レベル判定結果

学生名	留学年	性別	学年	クラスレベル	レベル判定 満足度
O	2012- 2013	男	M1	J4/J5	X
B	2013-	男	M1	J6	O
M	2013-	男	M1	作文J6 それ以 外J5	O

【スライド③-4】

三人の学生と日本語授業への評価

学生名	クラスレベル	文法	作文	読解	会話	留学生向け ゼミ	他の授業
O	J4/J5	O	O	難しすぎ	易しすぎ	O	異文化コ ミュニケー ション、多 文化関係 論
B	J6	O	O	O	O		現代社会 変動論、 消費文化
M	作文J6 それ 以外J5	△	O	易しすぎ	易しすぎ		近世日本 と世界、古 文書演習、 書誌学、 近世文学

【スライド③-5】

三人の学生と論文

学生名	他の授業	論文のテーマ	研究援助 チューター	本人の ステイタス	ステイタス 満足度
O	異文化コミュニケーション、 多文化関係論	日本人話者の フランス語→ 総合商社	学部の 三年生	学部生	X
B	現代社会変動論、 消費文化	日本の郊外の 画一化と行動 様式のアメリ カ化	分野違いの 学部生	学部生	X
M	近世日本と世界、 古文書演習、書誌学 近世文学	江戸時代初期 西日本の職人 組織	研究分野を同じく する院生	学部生	O

【スライド③-6】

パリ・デイドロ大学の日本語の授業の概要
(一年生)

主教材:「みんなの日本語」
 進度:原則一週間に一課
 文法(1,5時間、フランス語)
 漢字(1,5時間、フランス語)
 練習+仏文和訳(1,5時間、日仏半々)
 読解(1,5時間、フランス語)
 基礎会話(1,5時間、日本語)
 応用会話(1,5時間、日本語)

【スライド③-7】

パリ・デイドロ大学の日本語授業の概要 (二年生)

主教材:「みんなの日本語II」
進度:原則一週間に一課
文法(1,5時間、フランス語)
練習+漢字(1,5時間、日仏半々)
仏文和訳(1,5時間、フランス語)
読解(1,5時間、フランス語)
基礎会話(1,5時間、日本語)
応用会話(1,5時間、日本語)

【スライド③-8】

学生の授業評価の傾向(一、二年生)

❖概ね好評

❖高評価の理由

- 一週間の授業の流れ、授業間の整合性・補完性、
進捗
- 会話の授業(自分自身の進歩が感じられる) →
三年生になると評価が下がってくる

年齢的な成長、
語学力と知識・
関心の差

【スライド③-9】

語学以外の授業(一年生、二年生)

一年一学期	一年二学期	二年一学期	二年二学期
文化史入門	近世史	政治史 (近代・現代)	宗教学入門
中国・日本の 科学史	地理	古典文学入門	経済
日本社会入門	言語学入門	日本の労働界	現代日本の 社会学
			文学と翻訳

【スライド③-10】

三年生の授業

- (1)「テーマ別中級から学ぶ日本語」
 文法＋和文仏訳(1,5時間、仏人教師)
 練習＋和文仏訳(1,5時間、日本人教師)
- (2)作文(1,5時間、日本人教師)
- (3)会話(1,5時間、日本人教師)
- (4)読解(1,5時間×2、次の中で二つ選択、三つも可能)
 速読(日本人教師)、新聞・雑誌記事講読(フランス人教師)、文語(フランス人教師)
- (5)日本語能力試験準備講座(1,5時間、日本人教師)
 N3かN2
- (6)専門科目(3時間、一つ選択、二つも可能)
 一学期:社会学、日本語学、視覚文化、宗教
 二学期:政治経済、日本史、現代文学

【スライド③-11】

四年生の論文指導のための科目 ーメソドロジー(方法論)ー

- I. 自分の専門分野のメソドロジー(24時間)
 - ❖文芸
 - ❖言語学
 - ❖歴史学・社会科学
- II. 日本学のメソドロジー(12時間)
 - ❖日本
 - ❖中国
 - ❖韓国
 - ❖ベトナム

【スライド③-12】

結論

1. 修士一年生には、日本語の上達(A)と論文執筆(B)という二つの目標がある。
 - ❖AとBの間のバランス
 - ❖AとBの間の相互作用
2. 日本語の授業ではフランスにはできないことをするのが望ましい
 - ❖時事性が高いテーマ、現代日本社会に密着したテーマ、地域性の高いテーマ
 - ❖多くの日本人との意見交換、情報交換